近世後期の地誌編纂と地域文人ネットワーク
―『善光寺道名所図会』の分析を中心に―

網　島　　聖

〔抄　録〕
本稿では『善光寺道名所図会』を取り上げ、その取材・収集に協力したと考えられる書肆高美甚左衛門を中心とする地域文人ネットワークに注目して、信州松本町と一体となった周辺地域の地誌記述を検討し、松本町と周辺地域とを結びつけた地域認識について考察した。その結果、松本地域文人の人脈が城下町松本町を拠点とした街道に沿って周囲と結ばれており、その性質も流通に関する問題に規定されていることが判明した。『善光寺道名所図会』に記載される範囲としては、北は信濃大町周辺まで、東は千曲川西岸稲荷宿まで、西は橋場までの範囲となっていることを示した。
キーワード：地誌、松本町、地域文人、善光寺道名所図会、高美甚左衛門

Ⅰ　はじめに

（1）　問題の所在

近代における信州松本町（現在の長野県松本市）の地域認識を強く特徴づける要素として、中南信地域における政治・経済上の中心地という位置付けがある。明治9（1876）年の筑摩県廃止とそれに伴う県庁所在地としての地位の喪失、そして新たな長野県の県庁所在地となった長野（善光寺）町への対抗心から、松本町は地域住民によって、北信地域の中心地である長野町とは異なる中南信地域の中心地と位置付けられていった。こうした松本町と周辺地域との結びつきを重視する地域認識には、近代以降の度重なる政治運動、すなわち分県移庁運動を通じて強化、形成されていった一面が指摘できる（松本市1995a; 中村1991）。

その一方で、こうした政治的言説が影響力を持ち得た背景には、当時の地域住民にとって、松本町と周辺地域の結びつきが自明視されるような地域認識がすでに存在したことも否定できない。社会地理学、政治地理学では、明治前期の行政区画が持つ歴史的性格、特に藩政時代の領域構造や地域性との関係が議論の対象となってきた（井戸1966; 杉浦1991; 白石1975）。筆者は先に明治期に松本町で発行された『松本繁昌記』と題する地誌書を取り上げ、その記述内容に見られる地域認識の分析を行なった。その結果、明治期の松本町では周辺地域との商業上の結びつきを自地域の経済力の源泉とみなす位置付けを行なっており、こうした地域認識が江戸

期以来再生産されてきた様々な地誌書の引用により補強されていたことを確認した(網島2010)。

それでは、江戸期に発行されたどのような地誌書が、近代の松本周辺地域に関する地域認識に対して大きな影響を持ったのであろうか。まず、江戸期の松本町がもった政治的中心地としての意義を示した地誌書として『信府統記』が挙げられる(1)。『信府統記』は松本藩藩主水野忠幹の発意によって編纂事業が進められ、その没後は後継の忠恒に継承され、享保９(1724)年に完成した。これは当時の将軍徳川綱吉によって押し進められた文治政治の下、松本藩でも藩主忠周と忠幹の正徳から享保期にかけて進んだ文治主義的傾向の産物と評され、内容は松本の歴史・地誌を中心に、民間伝承までを登載する(2)。ただし、『信府統記』は執筆時点である享保期までの状況しか記載せず、またその射程は儒学/漢学の素養を基礎として信州全域を収めたものとなっており、住民の視点から松本周辺地域の一体性を特に強調するものとはなっていない。したがって、儒学/漢学の素養を十分持ち合わせない周辺地域の住民に対して、上述のような地域認識を受け入れさせた文脈を検討するためには、その生活、生業や娯楽などにも通じた別の地誌書も検討する必要がある。

(２)　本稿の目的

以上のような問題意識から、本稿では江戸期に発行され、近代以降の松本町の地誌書で盛んに引用されたもう一冊の地誌書である豊田利忠著『善光寺道名所図会』を取り上げ、松本町と周辺地域との一体性がどのように記されているかを検討する。『善光寺道名所図会』は中山道洗馬宿から松本町をへて善光寺に赴き、その後、中山道碓氷峠までに至る街道沿いの風物を紹介したもので、信濃の庶民生活を知る上で欠かせない文献とされる(青木1998)。

周知の通り、名所図会とは対象地域の名所旧跡や景勝地、街道、宿駅などを実際の景観を描写した挿絵とともに解説する旅行案内を目指し、近世後期に盛んに出版された地誌書である(矢守1984)。一般に、名所図会の出版においては、正確な地誌の記述と写実的な挿絵とが必要となるため、製作者には綿密な実地調査や高度な専門技術が要求される。そのため、本文の執筆と挿絵を製作する絵師とは別人であることも多く、複数人で製作されることも多かった。これに対して『善光寺道名所図会』は著者豊田利忠が本文から挿絵の大半までを自ら作成しており、名所図会として異色の存在といえ、その分だけ取材調査にも困難が倍加したことが想定される(青木1999)。

こうした取材調査に関する困難な状況を、著者の豊田が単独でどのように打開したのかについては、発行書肆の一つであった書肆高美甚左衛門らによる調査や企画への協力があったことに注目したい。近世後期の信州における書籍流通の要に存在した松本町の書肆・慶林堂高美屋は、明治以降も浅井洌・関口友愛『松本繁昌記』(1883年)や中村五一郎『桔梗が原』(1902年)の出版に携わり、山本實太郎『松本繁昌記』(1897年)の取材、編集に協力するなど地域における地誌書出版の雄として地域認識を編集し発信し続けた書店である。後述するように、豊田の

信州における取材には高美甚左衛門の手厚い協力があったことが指摘されている（青木1999）。また、近年の国文学研究の進展によって、初代高美甚左衛門（1748-1863）の営業や地域文人としての活動、そして人的交流の詳細が徐々に明らかになってきた（鈴木2006）。これらの成果を比較参照することで、『善光寺道名所図会』の掲載内容に結実した松本町と周辺地域の地域像が、当時の地域住民、とりわけ高美甚左衛門を中心とする地域文人のネットワークを介してどのように形成されていったのかを推測することが可能になるだろう。

以下の具体的行論としては、まず本稿で検討対象となる『善光寺道名所図会』の出版された背景と本稿の検討対象地域について概観した上で（Ⅱ）、書肆高美甚左衛門を中心とした近世後期の地域文人達の活動と性質について、近年の国文学研究の成果に依拠して整理する（Ⅲ）。特に、彼らがその出版や取材に関係したと思われる、十返舎一九の信州に関連する作品群への取材行に注目する。その上で、『善光寺道名所図会』の地誌記述と挿絵による景観描写を取材と典拠に注目して検討し（Ⅳ）、その掲載範囲について取材協力を行なった人脈を結びつけた文脈として街道が持つ意味を検討するという順序で進める（Ⅴ）。

Ⅱ　検討対象の概要

（１）　松本町と善光寺道（北国脇往還）

松本町はフォッサマグナにそって南北に伸びる松本盆地の一部を占める複合扇状地上にある（松本市1996: 2-4）。平安時代のはじめには信濃国の国府が松本に移され、近世以降は石川氏の松本城築城以来、信州随一の城下町として発達した。古くから交通の要地でもあり、西には野麦街道、南には伊那街道、北には千国街道と北国脇往還が発達し（図１）、商業・旅籠の町として栄えてきた。信濃国では小藩分立の状態が続き、それゆえ多くの大名領で領域経済圏を確保しようと志したものの、その実現が難しかったのに対して、松本藩ではある程度の規模を有していたためこれに成功していた。このことは経済的な独自性を持つことにもつながり、松本に社会的、文化的独自性をも与えたといえる（古川2000）。明治４年には筑摩県の県庁所在地となるが、明治９年筑摩県が廃止されて長野県となり県庁を失う。その後、陸軍歩兵第五十連隊、旧制松本高校や日本銀行松本支店を誘致し、結果として軍都、教育文化都市、製糸城下町などと呼ばれるようになった（小松1996）。

江戸時代において、伝馬が常備された五街道などの本街道に対して、副道のような関係にある街道を脇往還と称した。善光寺道（北国脇往還）は中山道の脇往還と位置付けられ、中山道から洗馬宿で別れて北行し、筑摩郡の郷原、村井、松本、岡田、苅谷原、会田、青柳、麻績宿から猿が番場峠を越えて更級郡の篠ノ井で北国街道に合流するまでの約20里に及ぶ道のりを指す。脇往還ではあったが、本陣や問屋があり、25人、25疋の人馬を常備し、明治期に現在の国道19

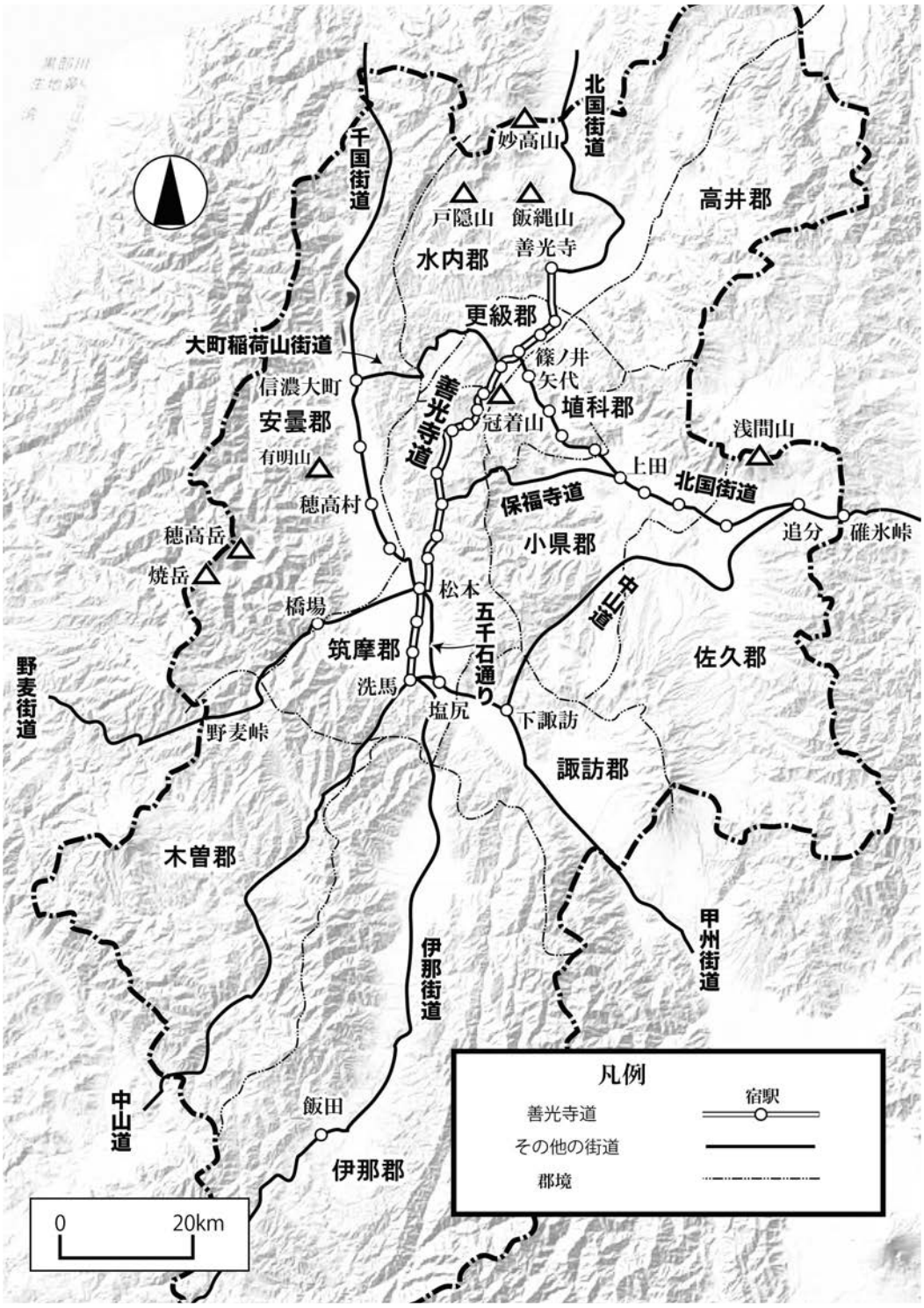

図１　検討対象地域の概要

号線が整備されるまでは、中南信と北信を結ぶ唯一の幹線道路であった（小松1981）。したがって、中南信地域や西国諸国からの善光寺参詣客の通行はもとより、物資流通においても大動脈であり、主に米穀類、炭、薪、酒、たばこ、茶などが運送された。

（２）『善光寺道名所図会』出版の背景

『善光寺道名所図会』は大本仕立て五巻五冊からなり、嘉永２年（1849）名古屋の書肆美濃屋伊六が刊行したものである。著者は尾張今尾藩竹腰氏の家臣であり、大和絵の名門土佐派の門人でもあった豊田利忠で、百八点の挿絵の大半も手掛けている。本書執筆の動機については、秋里籬島が著した『木曽路名所図会』で取り扱われなかった洗馬から善光寺に詣でて追分に至る道筋を描くこととしている（青木1998）。

「名所図会」に関して地理学の立場から矢守（1984）は、名所本・地誌類の系譜が、多様化する需要に即応して機能分化を見せ、内容の上で統合と分化の間を揺らいでいたことを指摘しつつ、統合方向の頂点にあるものと据えている。しかし、その総合的な性格のために、「名所図会」の作成には大きな困難があったことも確かである。青木（1999）は「名所図会」が様々な分野の専門家たちが長期間にわたって従事しなければ完成せず、多額の資金も必要となる企画であったから、民間人が容易に企画できる性格のものではなかった点を指摘し、その成立過程から、①秋里籬島によるもの、②藩の地誌編纂事業の過程から副産物として成立したもの、③相当な資産を有し、かつ藩のバックアップを得た人物の手になるもの、の３つに分類できるとし

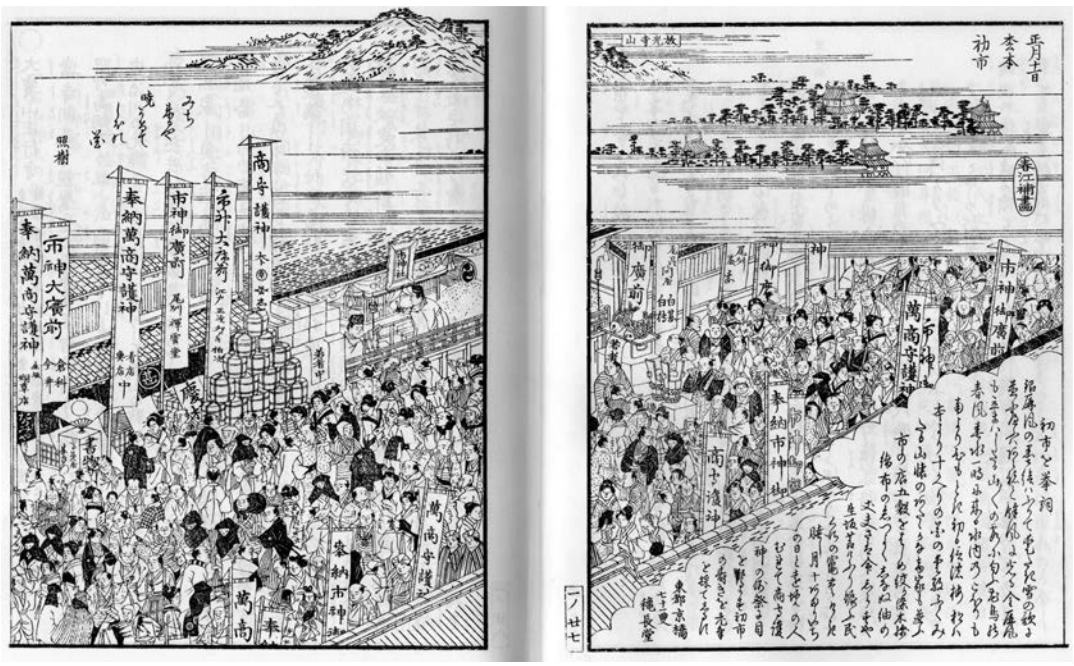

図２　『善光寺道名所図会』「正月十一日松本初市」の図

出典）　豊田庸園『版本地誌体系15　善光寺道名所図会』臨川書店．1997.

ている。

『善光寺道名所図会』の場合は尾張藩関係者や『尾張名所図会』のスタッフが関わってはいたが、信州を扱うものであるから尾張藩の援助は期待できない。また、著者の豊田利忠が資産家であったとする史料もなく、享保年間までの松本藩『信府統記』をのぞくと該当地域を網羅した参考になる地誌も存在していなかった。こうした事情から、取材調査に関する困難な状況の打開には、発行書肆の一つであった高美甚左衛門ら松本地域文人による調査や企画への協力があったと考えられる。その最も有力な根拠が、『善光寺道名所図会』「正月十一日松本初市の図」(図２)に描かれた、慶林堂高美書店の描写である。こうした描写は書肆高美屋にとって何よりの宣伝広告であり、取材協力への返礼とも考えられる。さらに、この挿画には照樹こと高美甚左衛門による句も添えられており、宣伝広告という経済的な返礼のみならず、文人としての甚左衛門を称揚する意図も加わっており、甚左衛門の背景に控ええる周辺地域の文人達を意識したものとも考えられる(青木1999)。

それでは、甚左衛門を中心とする松本地域文人達はどのような取材協力を行ったのであろうか。残念ながら『善光寺道名所図会』の取材過程に関わる資料は現在までに明らかになっていない。そこで、次章では、近年の国文学研究において解明された十返舎一九の松本来訪とその地誌的戯作の取材に対する協力過程を通じて、松本地域文人達の地誌編述事業への協力の事例を確認しておく。

Ⅲ　近世後期松本町の文人ネットワーク

(１)　書肆高美甚左衛門と松本地域文人サークル

まず、近世後期松本町における書肆高美甚左衛門を中心とする地域文人サークルの様子を概観し、若干の説明を加えておく。近世後期に爛熟していた都市文化と中国趣味の産物であった文人趣味の影響を受け、地方でも豪農や富商と称せられ相対的に暮しにゆとりのある素封家の閑人の中から地域文人と呼ばれる人びとがあらわれてきた(大室2002)。近世後期の松本町において、こうした地域文人達の中心にいたのが、書肆・高美甚左衛門であった。

初代高美屋甚左衛門常庸は、太物・小間物を商っていた松本本町の嶋屋(3)に生まれ、兄が営むその店の一部に本好きが高じて書店を開業し後に独立した、江戸時代の松本町においてはほぼはじめての専業書籍商であった(鈴木2005)。青年期には国学かぶれの行跡を残し、俳諧・狂歌を日常のごとく文人墨客とのまじわりのなかでおこなっており、松本町では全国の俳人・狂歌師・画工・武士・僧侶・社人・役者・相撲とり・商賈などさまざまな人物とあって、書林経営のあいまに文化活動を精力的に行なったとされる(松本市1995b: 695-713)。高美書店の仕入れは江戸・名古屋が中心となり(4)、特に彼の仕入れのための江戸行は、松本への豊富な書

籍流通をもたらすとともに、江戸での文人達との交流を通じて、その流行と風雅の風を松本にもたらすこととなった（鈴木2005）。なお、初代高美甚左衛門の没後、明治になって高美屋は筑摩県の御用を務めるなどして地域の出版にも深く関わり、さまざまな地域に密着した書籍を世に出していったことが判明している（鈴木1997）。

高美甚左衛門は上述のように多様な文化的活動を行っていたが、その中で狂歌に関して、松本における地域文人の集まりが明らかになっている。松本町での狂歌は、江戸での流行に影響されて、江戸狂歌あるいは天明狂歌の流れをくんで寛政末ころから流行した（松本市1995b: 695-713）。さらに、鹿都部真顔や酒月米人といった江戸の狂歌師が来訪して指導したことにより、松本地域文人の狂歌は水準を高め、文化十一年（1814）の『狂歌水篶集』に結実する。これは酒月米人の指導によって水篶連という狂歌結社が松本で旗揚げするまでになったことを記念するものでもある（鈴木2001）。水篶連には成相新田（現在の安曇野市豊科町）の庄屋である新田園長丸や、文の屋千鶴こと高美甚左衛門など多数の地域文人が名を連ねていた。『狂歌水篶集』の刊行された文化期、鹿都部真顔の狂歌碑[5]が深志神社に建立された文政期が松本における狂歌の最盛期となり、以降庶民文芸の主流は俳諧に移行する。なお、和歌が高雅の部類に属し、上・中層の武士身分から豪農・豪商クラスにかぎられたのに対して、狂歌は和歌よりも下の階層にも受け入れられ、俳諧はさらに多くの人々に親しまれたることとなった（松本市1995b: 695-713）。

（2）　十返舎一九の取材と松本地域文人ネットワーク

高美甚左衛門を中心とする近世後期松本地域文人サークル、とりわけ狂歌の水篶連と密接な交流を持ち、松本地域の地誌的記述を残した人物に、江戸時代後期に活躍した代表的な戯作者、十返舎一九がいた。一九は松本を二度訪れている。一度目は文化11（1814）年に約１か月、二度目は文政２（1819）年に３日間、いずれも高美甚左衛門方に滞在している。一九の当該地域取材の様子は松本周辺地域の地誌編纂に関する取材のあり様を考える上で一つの範型を提示するものと考えられる。以下では、『続膝栗毛』八編（1816）や、『方言修業　金草鞋』第十三編（1820）、『滑稽旅賀羅寿』（1822）などに見られる松本地域の描写を念頭に、とりわけ一九滞在中の様子が「高美甚左衛門日記[6]」（以下「日記」と略す）によって記録されている前者の滞在について整理し、松本地域文人サークルによる地域紹介の一端を確認する。

「日記」は、文化十一甲戌歳七月晦日に江戸から十返舎一九が門弟で版木師の花垣と来遊に訪れたところから始まる。高美甚左衛門は商用のために赴いた江戸で、通油町の本問屋・蔦屋重三郎を介して一九と出会い、その後懇意になって松本来訪を強く求め続けてきたとする。こうした度重なる要請がようやく結実したのが文化11（1814）年の一九による松本町来訪であり、その目的は「膝栗毛」出版のため、松本町を含む木曽路から善光寺までの北国脇往還を取材することであったとしている。ただし、「続膝栗毛　六編」（1807）の再序で一九自身が示すよう

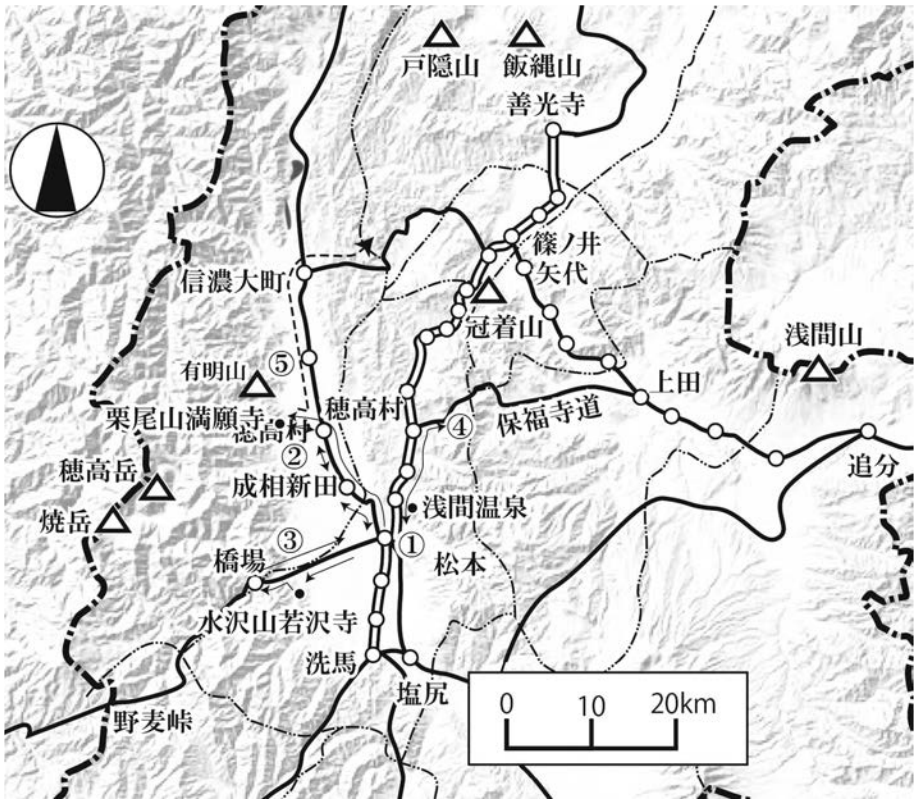

図３　文化11(1814)年の十返舎一九による松本町周辺取材行

唐木(1986:174-181)、鈴木(2001:7-36)を参照して作成。

に、新著執筆のために読者へ詳細な現地取材を行うことに加えて、すでに出来上がった作品を各地の人士に宣伝することも来訪の大きな目的であったことがうかがわれる。このように、地域を描写した一九の文芸作品の背後には各地の読者との密接な関係が存在したことを物語っている。

「日記」は滞在中の様子を、滞在の中心である松本の城下町、北の成相新田(現豊科町)と栗尾山満願寺、西の水沢寺と波田村、東の浅間温泉と保福寺という大きく四地区に分けて記している。それぞれの地区ごとに甚左衛門の目から見た取材行の概要を確認していこう。

まず、松本城下町では、一九は高美家に逗留しつつ、狂歌や川柳の興行への参加を求められていることを記す。なお、狂歌と川柳のサークルは重なっていないようであり、松本における様々な文芸をたしなむ層が一九を中心にそれぞれ集いを持ったようである(図３の①)。

次に、安曇郡への取材行については、狂歌判者であり、一九とかねてより文通もしていた成相新田の庄屋長丸による協力が浮かび上がる。彼は「膝栗毛」による新田通りや水内郡の水内橋(久米路橋)を一九に紹介することを熱望しており、一九はこの求めに応じて複数回、安曇郡へ赴くこととなる。ここからは、長丸が、安曇郡と信濃大町から善光寺へ至る本来の善光寺道とは異なる大町稲荷山道に沿った犀川河畔の景色を、成相新田を中心とした自地域のものと考

えており、これを宣伝する意図を持っていたと見られる。度重なる長丸の要請に根負けして、８月11日に甚左衛門も連れ立って一九は安曇郡へ赴く。「日記」は成相新田の長丸を訪れた後、さらに栗尾山満願寺へと足を伸ばして穂高村をはじめとする安曇郡の取材を続けたことを記している（図３の②）。穂高村では「保高二木や橋づめ宗左衛門」が饗応して一九を歓待するなど、安曇郡下の人脈が一九の取材行に便宜をはかったことがうかがわれる。なお、この途中で高美甚左衛門は所用のため、一旦、松本に引き返している[7]。

この後、松本に戻った一九は甚左衛門と合流し、波田村の水沢若沢寺を訪れる（図３の③）。この参詣には甚左衛門と親しい松本の人物も大挙して参加している。ただし、この際も甚左衛門一行はその日のうちに松本へと引き返す一方、一九は３～４日間逗留している。この帰り際、甚左衛門は波田宗左衛門主から一九に狂歌の揮毫を依頼してくれるように頼まれており、波田村でも交流を持ったことが察せられる。

若沢寺から松本に帰った一九は、今度は浅間温泉、保福寺へと出かける（図３の④）。甚左衛門に親しい数人がこのときも同伴して、冷泉為泰から和歌と重玉の銘をたまわった保福寺の「重玉の松」を見物に出向いていることがわかる。

なお、松本東郊の地域に関しては、このときの滞在中には注意していないが、文政五年（1822）に刊行された一人称の紀行文「滑稽旅賀羅寿」によると、一九は浅間温泉から保福寺峠を経て上田への保福寺道[8]を文政２（1819）年に行った２度目の松本来訪時に通行しており、「松本より上田へ十一里の道なり。もつとも難所にして、往来も近辺の商人の道なり」と記している（十返舎一九1822: 75）。

約１か月の滞在の後、一九は28日の朝、満願寺の御隠居の迎えに応じて、栗尾山満願寺を目指して松本を後にする（図３の⑤）。その際、松本町と在地の関係者を合わせて５両ほどの餞別を渡している。さらに、「池田［中や瀬左衛門/角や源之助］其外仁熊村などへ添書認遣ス」と、通り道にあたる池田宿や善光寺道沿いにある仁熊村の知人に当てた紹介状をしたためるなどしている。直接同道して紹介してはいないものの、これらの地区も松本地域文人にとって自地域とつながりの深い地域という認識があったものと思われる。「日記」による一九の調査行に関する記述はこの後越後方面を訪れてから江戸へ帰着したことを示すのみであるが、大町稲荷山街道を経て犀川沿いの道を善光寺平へ至ったと推察される（鈴木2001）。

以上を総合すると、松本文人サークルは十返舎一九に自地域を紹介するにあたって、成相新田、栗尾山満願寺、水沢若沢寺、浅間温泉、保福寺などの重要な名所旧跡や寺社を、それぞれ松本を起点に往復するいわばベースキャンプ型の訪問方式で紹介し、その後、成相新田を経て信濃大町から水内郡の犀川流域へと向かったことがわかる。安曇郡と松本町の地域文人同士をつなぐネットワークが高美甚左衛門を中心に発達していた様を物語る証左と見ることができよう。ただし、北方に向けて直接結びつくのは千国街道沿いでは池田まで、善光寺道沿いでは仁熊村までとなっていることに注意が必要である。そこより先については、また新たなネット

ワークも加わって取材が行われたと考えられるからである。

ところで、一九の取材では犀川沿いの水内郡下がとりわけ安曇郡の長丸にとって自地域に含まれること、千国街道、大町稲荷山街道、保福寺道、野麦街道などの主要な商業流通路沿いにある場所を主に見ていることなどが見て取れた。都人士である十返舎一九の筆を経て全国の「膝栗毛」読者に広く紹介される自地域の場所には、もちろん観光や参詣の目的に適った場所が選ばれることになるが、それらの場所が選ばれた理由として、方々の地域の紹介者同士を日頃からつなぐ流通や商業といった経済的関係も見過ごすことができない。この点に関してはⅤ章でさらに考察することにしたい。

Ⅳ『善光寺道名所図会』の記載内容

(１)『善光寺道名所図会』の掲載ルートと取材

『善光寺道名所図会』は基本的に善光寺道の街道に沿って順に記述していくスタイルを取る。しかしながら、一部地域については街道上の分岐点から本道である善光寺道を逸脱して辿り、その後拠点まで戻る箇所が数箇所ある。以下では、現地での取材により反映された地域住民の地域認識を検討するために、こうした記載の順に注意して内容を検討していく(図４)。

『善光寺道名所図会』は洗馬宿から松本まで至った後、塩尻へ通じる五千石通りを金峰山牛伏寺まで、北西方向の千国街道へ入って穂高村、安曇郡信濃大町を経て仁科三湖まで、さらに西へ野麦街道を辿って橋場(島々村)までを順繰りに往復する。この間、千国街道沿いの安曇郡池田と大町は項目を分けるが、その他は松本の紹介に含めている。その後、松本に戻り善光寺道を進むが、筑摩郡法橋から仁熊村へ短距離の寄り道をする。法橋から更級郡稲荷山までは善光寺道に沿って進むが、猿が番場峠の茶店への短い寄り道をへて、さらに犀川に沿って久米路橋まで大きく西行する。稲荷山に戻った後は善光寺に参詣し、飯縄山を経て戸隠山へと赴く。善光寺に戻ると、北国街道に入り、更級郡丹波島宿から小県郡上田を経て追分に至る。以上のように、大きく分けて松本を基点とする三街道、稲荷山からの犀川流域、そして善光寺からの飯縄山、戸隠山についてメインルートから逸脱して寄り道していることがわかる。

紹介地点について見ていくと、合計24の宿駅ごとに周辺三里四方の範囲にある名所旧跡を紹介していくスタイルを取る。巻頭の目録から確認すると、付録の７項目を除き、五巻で327の名所ないしは関連事項を紹介している(表１)。宿駅ごとの紹介地点数を見ていくと、参詣の目的地である水内郡善光寺が156箇所で最多となるが、これは善光寺内の様々な事物を列挙して紹介していることと飯縄山、戸隠山への言及も含まれることによる。これに次いで筑摩郡松本が29、更級郡稲荷山が25、更級郡丹波島が22、小県郡上田が14となる。ただし、松本については千国街道沿い穂高村までの地域が、稲荷山については犀川流域の地域が含まれており、これ

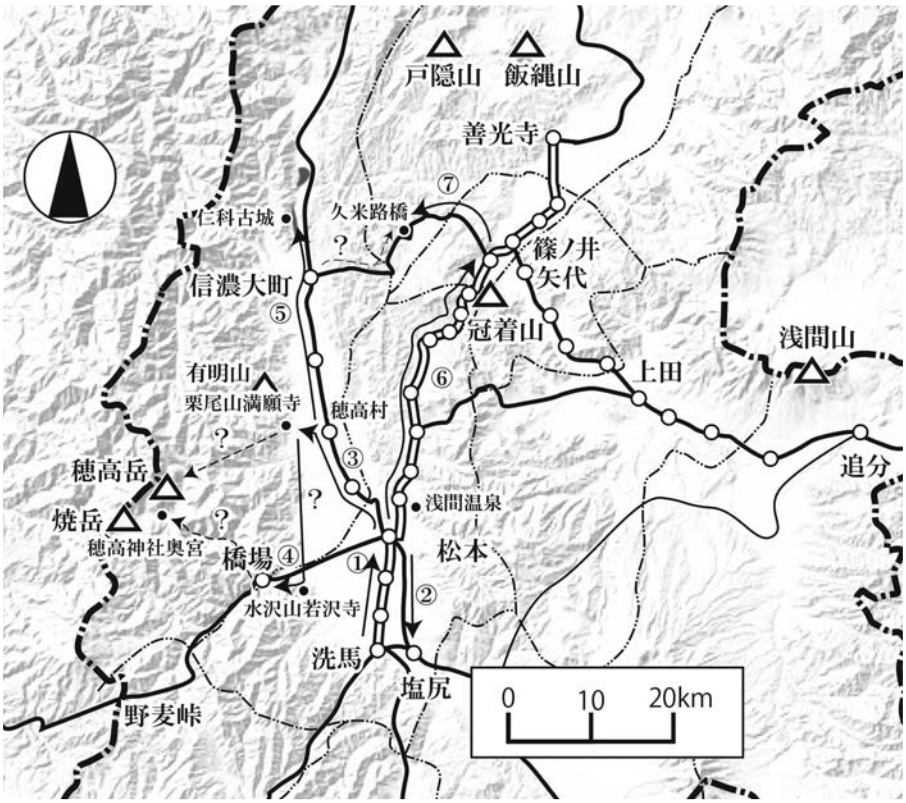

図４　『善光寺道名所図会』における松本地方記述の順路

らを除くとそれぞれ20、14となる。これに対して、紹介される事項の少なさが目立つのが善光寺道沿い筑摩郡の岡田から青柳までの地域である。

続いて、各地での取材実態を推測するため、記載内容の典拠が明記されているものについて検証していく。表１から宿駅ごとに示された典拠を確認していくと、全体に共通する基本文献として、「甲陽軍鑑」、「和漢事始」、「塩尻」、「三代実録」、「延喜式」、「日本書紀」、「信濃地名考」などが挙げられる。上で見た筑摩郡の岡田から青柳の善光寺道沿いで紹介される事項が少ない地域があったが、これらの地域の紹介ではこうした基本文献からの引用が少ないことも見て取れる。一方、地域的に特色が出ている引用文献としては、筑摩郷原の「桔梗が原記」、穂高岳の「穂高岳記」、安曇大町の「佐野日記」などが挙げられる。さらに詳細に見ていくと、典拠こそ明示されないが、松本周辺や安曇郡、そして丹波島宿周辺では「或記に曰」ないし「或記上略」という表現での引用が多用されている。これらの地域では現地での取材において提供された地域の文書が存在したものと思われる。同様に、これらの地域では「里老の話」あるいは「里俗に曰」とする表現も散見され、取材対象の現地住民、あるいは調査協力者から証言が得られた内容も記載されている。この点については「云々」、「なりとそ」などの表記で明瞭でない場合も多く、量的な把握は難しいが、松本、大町、法橋、麻績、稲荷山、丹波島、小諸では「俚俗」として周辺住民からの聞き取り内容をもとにした生業や民俗に関する記述が行

表１『善光寺道名所図会』の典拠と取材

巻	宿駅	名所	文献	聞き取り
一	（東山道岐蘇路）	元洗馬（光輪寺）	新著聞集	
一	筑摩洗馬	洗馬、太田清水、木曽川、肘松	甲陽軍鑑、松本藩天童誌	
一	筑摩郷原	郷原、桔梗が原、原新田	桔梗が原記	
一	筑摩村井	村井、冨士見橋、平田村、出川町		
一	筑摩松本	松本、築魔八幡宮、宮村大明神、初市立、大宝山正行寺、木曽山長称寺、源智井、北林山極楽寺、松本産物、竜雲山広沢寺、兎田、金峰山保福寺、金峰山牛伏寺、白糸の御湯、浅間温泉、清水里、桐原牧の跡、愛初川、養老坂、熊倉橋、穂高町村、穂高神社、天神原、穂高岳、焼岳、栗尾山満願寺、水沢山若沢寺、雑食橋	国史略、落穂集、腐紺集、なるべし、和事始、軍鑑八代記上略、塩尻、日本紀、宇治拾遺、漢事始、一本堂薬選、延喜式、神代巻、日本書紀、古事記伝、信濃地名考、穂高岳記	里老の話（２）、或が曰（２）、寺伝（２）
一、二	安曇池田	池田駅、宮本神明宮、仁科街道、清音の滝、静の墳墓、磯禅尼が塚	幽谷余韻、磯禅師墓誌銘、義経一代記、牛馬問	
二	安曇大町	大町、仁科の古城、森村の湖水、佐野の二僧の塚	西行撰集抄、幽谷余韻、佐野日記	旧俗伝
二	筑摩岡田	岡田宿、あだ坂		
二	筑摩苅屋原	苅屋原、鷹巣根の古城	和事始	
二	筑摩会田	会田宿、広田寺、弘法大師袈裟掛松、無量寺、岩井堂、立峠		寺伝、縁起
二	筑摩乱橋	乱橋		
二	筑摩法橋	法橋、松森山神明、霰石を採図説		富迺門正村（長物語）
二	筑摩青柳	青柳		
二	筑摩麻績	麻績宿、光明寺、神明宮、猿ケ馬場、弘法大師袈裟掛松、蟹清水、夜が池、燧石、中原の古松、桑原の葡萄棚	和事始	和田与惣右衛門
二	更科稲荷山	稲荷山宿、謙信出城跡、武水別神社、姨捨山、長楽寺、冠着山、長谷寺、長谷神社、将軍塚、白助之翁の碑、白鳥山康楽寺、篠井追分、長勝寺二王、鐡殺田、久米路橋、竜宮岩、不動が滝、館の岩、弥太郎が滝、吉原の譜、熊野権現、牧の島、琵琶が城跡、犀川水源、犀川名義	三代実録、延喜式、東鑑、川中島四戦記、甲陽軍鑑、大和物語、袖中抄、無名抄、日本紀、壒嚢鈔、吉原の譜、信濃地名考	問屋松木完司、縁起、寺伝、宇都呂菴主が見せ侍りし書付
三	水内善光寺	善光寺駅、北国街道、美和神社、善光寺関連（61）、薬山ぶらんど薬師、山吹の瀬、長原温泉、善光寺七社、、同七橋、同七清水、同七井、同七塚、栗田刑部城址、横山信濃城跡、塩沢温泉、桂山古城、飯縄里宮、御供所、仁科氏宅、飯縄奥岳、駒返し、千日屋鋪跡、篭屋、飯砂、天狗の遊所、飯縄原飯の岑	塩尻、神名記、和漢三才図会、古今著聞集、日本書紀、四宜楼説、群書類従（善光寺紀行）、漢事始	或老僧の曰、縁起
四	水内善光寺（戸隠）	戸隠山三谷、中院権現、戸隠山（24）、戸隠領、戸隠一の鳥居、放光院権現本社（4）、奥の院道条（13）、奥の院本社（14）、二季の祭、紅葉狩、鬼無里村、浦見の山、明助山観音寺、木留明神、熊谷山蓮正寺、夜留番所、大燈籠、千代鶴姫・玉鶴姫塚、犀川の渡口	和漢三才図会、太平記、日本書紀、塩尻、元享釈書、戸隠詣、草庵集、駿台雑話	或曰（2）、縁起
四	更科丹波嶋	丹波嶋、三疋山最明寺、今井兼平塚、茶臼山、北原、篠井追分、川中島、八幡原、信玄謙信対陣、同軍掛り、武田典厩塚、諸角豊後塚、山本道鬼古墳、水鉋斗売神社、横田川原、千曲川鯉の図説、西条山、松代、祝神社、蓮乗寺、山本勘介碑、高坂弾正塚	塩尻、本朝三将伝、武辺咄、或記曰、駿台雑話、扶桑略記、地名考、海津往来、或書曰、甲越軍記、三将伝	俚俗
四	埴科矢代	矢代宿、雨の宮、一重山、鼻取地蔵、菽蒔、下戸倉	信濃地名考	始末を聞、縁起、村上家の朱印物
四	埴科坂木	坂木宿、榊神社、村上山満泉寺、村上義清塚、葛尾古城、中の条、鼠宿、岩鼻、半過	信府統記	閑院宮御祈願所の摺物
五	埴科坂木	北向堂、安楽寺、常楽寺、熊野宮、横吹滝、男神嶽、女神嶽、氷沢、御茶屋、七久里温泉	別所七久里温泉由来記、出浦古記、信濃地名考	由来を尋ねるに
五	小県上田	上田、大宮、国分寺	続日本紀	神木の伝、社伝
五	小県海野	海野、海野平、白鳥宮、海野小太郎城跡	白鳥宮鎮座本記、甲越軍記、海野平合戦手鑑	
五	小県田中	田中		
五	小県小諸	小諸、布引山、釈尊寺、真福寺、楽岩寺古城、浅間山、三ツ屋、馬瀬口、濁川、御料境、浅間山大焼略説、鶴の巣篭、追分、碓氷嶺権現	信濃地名考	神主小林市正、俚老談、古老の談、或人…見せ侍りし
五	付録	関東、信濃国内謡曲目録、信州名物、蓼科山、金峰山の山男、物臭太郎塚、同物語		

注）宿駅、名所については各巻頭の目録をもとに作成した。

われており、一部では話者の名前も明示されている。逆に善光寺では聞き取り対象も僧であることが明示されており、仏教に関する内容でほぼ占められることと好対照をなす(9)。

次に、写実性を付与するために、より実地の取材が求められたと考えられる景観を描写した

挿絵の内容を分析する。『善光寺道名所図会』には総数108の挿絵が掲載されているが、そのうち６つは考古遺物や神事に用いられる能面、仏像、鯉などの事物のスケッチが含まれ、29については歴史上の情景の想像図が含まれる。また、四巻、五巻では川中島の合戦をはじめとする古戦場に関する地図（絵図）となっている。これらを除いた73が同時代の取材に基づく景観の描写となる。また、このうち19については『尾張名所図会』の挿絵を描いた小田切忠近が豊田利忠の下絵に基づいて「補画」されている。

表２　『善光寺道名所図会』挿絵の景観描写範囲

巻	狭域	中域	広域
一巻	5	4	12
二巻	1	6	10
三巻	1	4	6
四巻	3	3	11
五巻	2	1	5

図５　『善光寺道名所図会』源智井の図
出典）豊田庸園『版本地誌体系15　善光寺道名所図会』臨川書店．1997.

ここでは、便宜上、景観を描写した挿絵を描写範囲の広さから３つに分けた（表２）。第一に、屋内や個人の庭園などを対象としたもので、人物を含む場合も５人程度までのものを狭域描写とした（図５）。狭域描写は総数で28点をかぞえ、一巻にやや多く含まれる傾向が見られた。これは松本町近郊の個人宅にある庭園を描写した挿絵が複数含まれることによる。次に、街路や田圃、仏閣などの情景を対象に、その中で行われる民俗や生業の様子を描くことに主眼があり、人物を含む場合は十～数十人程度で個人が識別できるものを中域描写とした（図２）。中域描写は総数で26点を数え、五巻が１点のみと少ない以外は数点ずつを含む結果となった。なお、五巻の中域描写は上田の呉服店の軒先を描いたもので、これのみ「汲古園墨山画」となっている点からも、他の取材とは異なる過程で製作された可能性が考えられる。最後に、中域以上の範囲を含み、寺域全体から盆地、谷の全体像までを対象とし、構図の中に複数の要素が含まれそれらの配置関係を把握することに主眼があって、人物が描写され場合もそれぞれ見分けがつかないほど小さく描かれる鳥瞰図風のものについて広域描写とした（図６）。総数で41点含まれ、３類型の中で最も数が多い。ただし、一、二、四巻が10点程度含むのに対して、三、五巻は５点程度と約半分ほどにとどまる。そもそも挿絵の数が少ない五巻は別にして、三巻は善光寺内の描写が多く、善光寺については寺域全体を描いた３点を除いて広域で描写する必要のある景観が少なかったことが考えられる。

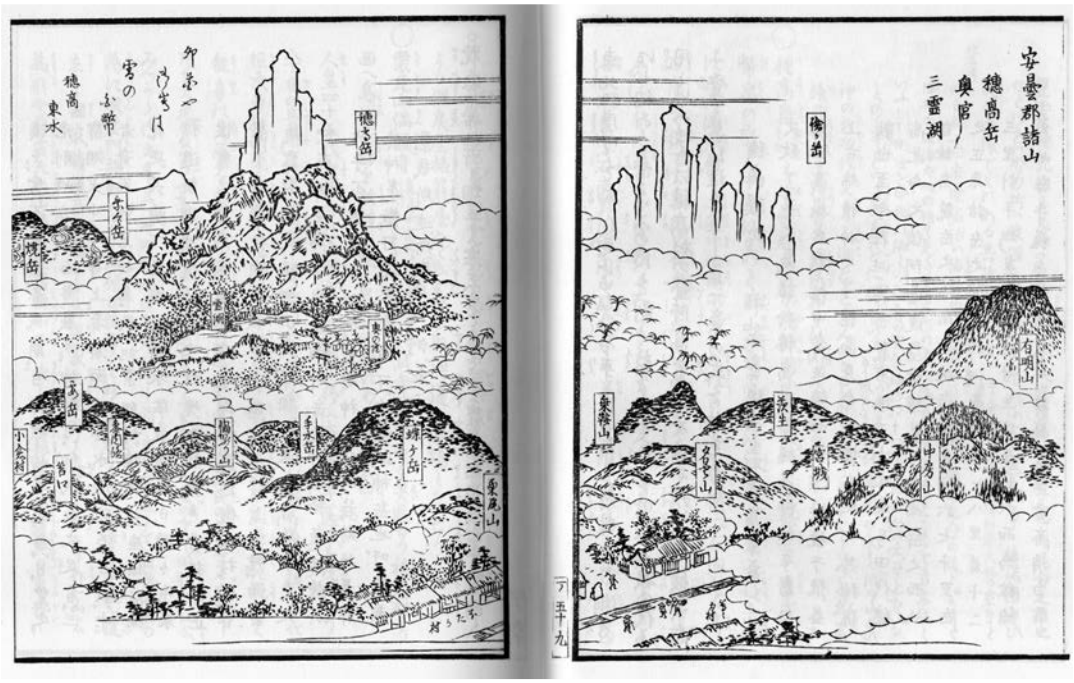

図６　『善光寺道名所図会』安曇郡諸山図

出典）　豊田庸園『版本地誌体系15　善光寺道名所図会』臨川書店．1997.

以上のように、『善光寺道名所図会』では、文献のみに依拠することなく善光寺道(北国脇往還)に沿って取材を重ねて記述と景観描写を進めていたことがうかがわれる。しかし、三巻では取材内容が善光寺の由来に関するものに重心が見られるのに対して、一巻、二巻、四巻では「俚俗」に対する関心から取材した民俗や生業に関する内容が豊富に含まれているなど、巻によって記載内容や描写内容に特徴があることが判明した。こうした偏りは、取材対象を紹介していく地域の人的ネットワークに依存するところが大きいものと考えられる。以下では、前節で十返舎一九の来訪について整理した松本町の地域文人ネットワークを念頭に、筑摩郡、安曇郡および水内郡の犀川沿いを記している一巻、二巻の地誌的内容に絞って、より詳細に検討していく。

（２）『善光寺道名所図会』の掲載内容の地域特性

①松本町を中心とした記述(図４の①)

城下町松本に関しては、まず「商家軒をならべ、当国第一の都会にて、信府と称す、相伝ふ牛馬の荷物一日に千駄附入て、また千駄附送るとぞ、実に繁盛の地也[10]」(信濃史料刊行会 1983: 25)と表現しつつ、沿革や城下町の規模を記述している。

近辺の寺社仏閣等の紹介が続く中でひときわ目立つのが、宮村大明神に関する記述に併記された初市の詳細な様子である。初市の由来や風俗を「里老の話」や『国史略』等の文献を引いて事細かに描写しつつ、「諸国の商人建る幟は春風にひらめき、種々の捧物ハ宝の山をなして

所せく、実も信府の繁昌想像べし」（信濃史料刊行会1983: 32）と、城下町松本の都市としての賑わいを初市に代表させている。また、先に見た「正月十一日松本初市の図」（図２）では、初市で賑わう松本の様子が描かれていた。背景をなす放光寺山（城山）と松本城の絵画的な表現[11]とは対称的に、前景をなす初市を迎えた本町の様子は非常に説明的である。この図には先に指摘したように、慶林堂高美甚左衛門書店の軒先がそれと分かるよう明瞭に描かれている。また、本町通り沿いに掲げられた奉納の幟には各々識別できるよう明確に商店や肝煎や問屋といった町の有力者数件の名前が描きこまれている[12]。すなわち、これらに名前が見える人物が調査協力者であったと推察される。

源智井については詳細な挿絵を付しつつ（図５）、酒造と深い関係にあることが述べられており、その水から作られる銘酒の紹介を行っている。また、銘酒に続いて、「其外名産○絞類○真篤籠○羽子板○ひいな○清水の里の紙登鮭○同鱒○烏川の硯石○生坂莨等皆当地の名産とす、中にも絞類・紙類・莨等諸国へ運送する事夥しといふ」（信濃史料刊行会1983: 40）と、松本名産品の紹介とその流通の活況が述べられている。さらに、「生坂莨御前生坂など世に賞する其根元を尋るに、犀川の河上に河並十三ヶ村と畏怖あり、其内の上生坂にて製するを莨の上品といふ、（中略）御前生坂といふハ上生坂村につくるをのみいふとぞ」（信濃史料刊行会1983: 40）とあり、生坂煙草に関しては詳細な紹介を行っている。「正月十一日松本初市の図」（図２）にも「生坂烱草」の表記が見られるなど、当時における全国的な生坂煙草の知名度を示すものとなっている（太田2003; 小野2004）。

このように、城下町松本の地誌的記述は、商業的な活況に焦点が当てられていることが特徴である。凡例に「此街道は中山道の脇道なれバ、先哲の紀行及び古歌なども稀にて、たゞ善光寺参詣の信者のみ行かふ辺鄙なり」（信濃史料刊行会1983: 7）とあるように、地域全体が名所旧跡や和歌に詠まれたナドコロに乏しい性格にあるとはいえ、「蔑篤」であるはずの土地においても、松本町には都市的な景観が発達していたことの証左といえるだろう。

②五千石通りに関する記述（図４の②）

次に松本から塩尻へ善光寺道に並行して通じている五千石通りを基軸に、松本の東側に位置する筑摩山地沿いの地区が記述されていく。なお、各項目は宿駅ごとに分けられており、この地区の記述も松本の区分に含まれている。十返舎一九も訪れていた埴原村保福寺に関しては「重玉の松」とともに冷泉為泰による和歌を引用しつつ記されている。また、さらに南下して金峯山牛伏寺に関して松本平の湖水伝説を記している。

しかし、とりわけ目を引くのは南埴原村の百瀬政武氏林泉の紹介である。詳細な林泉図が挿入されていることからも、百瀬政武が自宅を取材させていたことは間違いない。百瀬政武は堂上派の冷泉為恭に歌風を学んだ地域文人であり（松本市1995b: 695-713）、彼も調査協力に深く関わっていた可能性が指摘されている（青木1998）。ここで単純に松本と保福寺や牛伏寺の往復を記すのではなく、「閑道なり、旅人ハ通らざれども、霊場の一二をしるす」と道筋を強調し

つつ(信濃史料刊行会1983: 50)、五千石通りに沿って南へ牛伏寺まで進み、再び北へ浅間温泉へと戻る不自然な順序、配列で記述がなされているのも、百瀬政武をはじめとする松本町の有力者とは異なる系統の調査協力者が影響したのではないかと推察される。

その後、再び北上して、束間の温泉(白糸の湯)、犬飼の湯(浅間温泉)に関する記述では、歌名所として和歌を複数引用するものの、『温泉考』からの引用や、浅間温泉の風情を描いた図など、湯治場としての案内も目立つ。

③千国街道(安曇郡)に関する記述(図４の③)

続いて、千国街道に沿った穂高村までの地区の記述がなされている。凡例では、「大抵左右三里が程の名だゝる処著すといへども、殊に著き大社等に至りてハ、三里を越たるも是を出す、穂高及び戸隠の類い是なり」あるいは、「松本より岡田宿へ移を善光寺への順道とすれど、愛染川より養老阪へ転ぜるは、安曇郡の内なる名だゝる所々を挙て勝情に備ふる故なり」や、「安曇郡の内ハ脇道なれども、此序に名高く聞えし所々を挙、心あらむ人の道標にもと、古老の野譚をも拾ひて是を附す」などと(信濃史料刊行会1983: 7)、再三に渡って、ここで記述されている地区が本来の善光寺道から逸脱していることを意識して、取り上げた理由を説明している。

松本から成相新田をへて、穂高村にいたる安曇郡に関する記述は、三里以上離れた場所も含むが松本の項に含まれており、穂高神社に関する記述にかなり重心をおいた記述になっている。しかしながら、地域認識に関してとりわけ目に付くのが、穂高神社奥宮の位置する穂高岳、神河内(上高地)の記述と「安曇郡諸山　穂高岳　奥宮　三霊湖」の図である(図６)。「穂高嶽［奥岳と云］は安曇郡西の方飛驒国に坂合ふ、仰ハ霊岳雲を凌ぎて幣帛のごとく、中空に秀て、群山麓に児立す」と、穂高岳を、続いて「嶽に三の湖水あり、上池・中池倶に大さ凡径百四五十間、横二百間ほど、奇石岸を繞りて自然の林泉を成せり、…夫より東北の広野を神河内といひ、神が平ともいひて柳林なり」と(信濃史料刊行会1983: 75)、穂高神社奥宮・明神池と上高地を記述している。また、穂高村の医師高島章貞による『穂高岳記[13]』を引用している。

穂高神社奥宮周辺の描写は詳細ではあるが、実際に著者が上高地を訪れたとは考えにくい。明治時代までは里社から奥社まで途中一泊の行程であったばかりか、その登山道は狩人道で難路であったとされる(青木1985)。また、「安曇郡諸山　穂高岳　奥宮　三霊湖」の図では蝶ヶ岳や中房山、有明山などの麓から望める山並が非常に具象的、写実的であるのに対して、穂高村周辺からは遠望すらできない槍ヶ岳や穂高岳、乗鞍岳の姿は完全に抽象化されている。さらに、次項で見るように、この後の記述の順は南西の波田村へ転じ、千国街道からは逸脱してしまう。実際にどの程度これらの山岳地帯を穂高村に関連する土地と認識していたのか判然としないのである。なお、十返舎一九も訪れていた、穂高村西方にある栗尾山満願寺に関しても記述が見られ、先の「安曇郡諸山　穂高岳　奥宮　三霊湖」の図中にも栗尾山の描写が見られる。

④飛驒街道に関する記述(図４の④)

ここで順序に混乱が見られるが、穂高村からそのまま続いて松本西方の野麦街道沿いの地区が記述されている。まず十返舎一九も訪れていた上波田村水沢若沢寺が記述されており、「観音の千のみてらにもろ人の機縁を結ぶ水沢の山　東都　十返舎一九賦判々」と、一九の狂歌も載せられている（信濃史料刊行会1983: 81）。さらに西へ進んで雑食橋と橋場（島々村）が記述されている。「水澤　若沢寺伽藍并雑食橋之図」でも、若沢寺の全景の右上には島々村を中心とした野麦街道の様子が詳細に描かれており、野麦街道に沿った取材が行われたことを暗示している。また、「酒造家などありて、山間の一邑なり」と称される橋場では「島々村徳衛門」という人名が記述されており、橋場での取材のあとがうかがわれる（信濃史料刊行会1983: 81）。

ここで、前項で述べた記述の順序と道順の混乱が問題となる。橋場は穂高村の項で紹介された穂高神社奥宮のある上高地明神への入り口となる地点である。本来、奥宮を実地に訪ねていたのであれば、橋場の先に徳本峠を越えて上高地に至る道順となったはずである。しかしながら、上高地を抜けて飛騨高山へと至る飛騨新道の開削が行われるのは天保６（1835）年のことであり、それ以前はもっぱら松本藩有林の木材伐採に赴く杣人が利用する道であった（市川1998; 朝日新聞松本支局1982）。こうしたことを考え合わせると、飛騨新道の開削とほぼ同時期に善光寺道の取材を進めていた豊田利忠が実際にこの道を辿り穂高神社奥宮を訪れていたとは考えにくい。

そこで注目したいのが、穂高岳南方に位置する焼岳に関する記述である。「近来山開けてより温泉屋・旅籠屋など出来て、飛騨道の憩場となれり」（信濃史料刊行会1983: 80）とあり、また図６にも焼岳の描写が認められることから、実地には訪問していないが、おそらくこの記述を結節点として穂高村から野麦街道沿いの記述へと繋がったものと考えられる。いずれにせよ、穂高村以南の安曇野と野麦街道沿いの地区に関する取材は、距離の遠近に関わらずこれらの地区が全て松本の項に含まれていることからも、十返舎一九が行ったベースキャンプ型の取材行のように、人脈などの点で松本の調査協力者による強い影響下にあった可能性が高いといえ、そうした調査の順番と、道順に沿った記述の順番が矛盾をきたした例とも考えられよう。

⑤千国街道池田以北（仁科街道）（図４の⑤）

島々村から再び穂高村へと戻り、千国街道に沿って安曇郡池田宿の記述が続く。宿駅に関連づけて項目を松本から分けていることからも、若干穂高村以南に比べて松本町からの心理的な距離を感じさせる。信濃富士とも称される有明山では歌名所として複数の和歌を引用している。さらに信濃大町の区分では仁科三湖、佐野へと続く千国街道道中の名所旧跡を記述している。挿絵中には千国街道をいく歩荷や中牛による物資輸送の様子や、青木湖での漁業の情景などが描き込まれているが、本文は西行法師に関わる事跡の紹介でほぼ占められている。

ここからさらに糸魚川へ至る千国街道と、「大町辺より右へ入り、戸隠通り善光寺へ出る」（信濃史料刊行会1983: 118）大町街道の存在を示唆しているが、「常の往還」ではないとして、一度松本へ引き返して記述することとなる。

⑥善光寺道沿い稲荷山までの記述(図４の⑥)

続いて、松本から、岡田、苅屋原、会田、乱橋、法橋、青柳、麻績そして猿ガ馬場峠をへて更科郡稲荷山への道中が記述されている。途中、法橋(西条村)の項では[14]、一里半本街道から離れて仁熊村に狂歌師臨泉亭真村を訪ねている。前章では高美甚左衛門が仁熊村への紹介状を十返舎一九に書いていたのを見たが、おそらくこの真村に当てたものと思われる(鈴木2001)。

なお、真村が語った内容として槍ヶ岳北面の湯股沢・水股沢に関して引用している。湯股沢での霰石の採取や槍ヶ岳山麓の熊狩りなどについて記しつつ、挿絵を付してこの山域の地理を事細かに描出している。先に見た穂高村の穂高神社奥宮に関する内容と合わせて、近世においても地域住民が飛騨山脈中の山岳地帯に奥深く分け入っており、詳細な地理的知識を持っていたことが分かる。

更級郡に入り、稲荷山からは姥捨山を訪れている。歌名所である姥捨山では多数の和歌を引用した上で、「近き東し東都の狂歌堂真顔此地に遊びて歌あり、それを仁熊の里富酒門の真村等が徒石に彫て建、そのうた　姥捨の山の月かけ哀さにうしろ負て帰るて見つ」と記述しており(信濃史料刊行会1983: 155)、真村ら松本地域文人サークルにとっても、姥捨山を重要な自地域の名所と目していたことが分かる。一方、松代藩による独自の間の宿である桑原宿[15]に関しては「桑原村を越て」(信濃史料刊行会1983: 134)とあるだけでほとんど記述がない。

⑦水内郡犀川沿いの記述(図４の⑦)

稲荷山から篠ノ井追分に至ると、本街道から離れて今度は犀川に沿って水内郡を川上へ向かっている。信濃大町から水内村を経て稲荷山、篠ノ井追分にいたる犀川沿いの大町稲荷山街道は、十返舎一九を迎えた成相新田大庄屋長丸が自地域の景勝地として推していた所であったが、ここでは篠ノ井追分から逆に川をさかのぼる方向で記述されている。また、先に見たように大町から善光寺に至る道は「常の往還」ではないので記述が控えられている上に、「戸隠通り善光寺へ出る」(信濃史料刊行会1983: 118)と、あることから大町稲荷山街道ではなく戸隠を経由する大町街道のことを指していると思われ、安曇郡と水内郡を直接結びつける意図は感じられない。しかし、自序では「池田の西に有明山青霄に聳へ、枇杷か城ハ甲軍馬場美濃守か陳跡、久米路の橋弥太郎か滝は、倶に犀川上流にあり」(信濃史料刊行会1983: 6)と、大町稲荷山街道に沿った順序で水内郡の紹介がなされており、松本平側からなんらかの働きかけがあってこの地区を取材した可能性も捨てきれない。記述に沿って見ていくと、水内郡側から、久米路橋、水内村、弥太郎が滝、吉原村、牧之島古城の順番に書かれている。その際、「久米路のはし、弥太郎が滝、津瀬大黒岩、光明嵓、是らハ、皆犀川の流につゞきたる名ところなり」(信濃史料刊行会1983: 169)などとあり、犀川に沿って景勝地を紹介する意図が強く表れている。また、犀川に関する由来が語られ、源流から日本海までの流路を紹介しつつ、松本平の湖水伝説に関して一巻で述べた牛伏寺の縁起を再び引用するなど、松本平側からの取材への働きかけが感じられる内容になっている。

以上のように、松本地域における『善光寺道名所図会』の地誌記述の内容は、一部に相違する点も見られるが、概ね前章で整理した十返舎一九が辿った順路と一致しており、松本町を中心とした松本地域文人サークルによるネットワークを介した取材協力の上に成り立っていたと考えられる。また、多くの場合は松本町を基地として流通路に沿った往復型の取材が行われた可能性が高い。

以上の内容より、各街道によって結ばれた松本地域文人ネットワークが『善光寺道名所図会』の取材協力を進めた様子が浮かび上がる。彼らは文人でありつつ、また一方で経済的関心によって結ばれた町人や農民であった。また、松本地域文人の焦点となる高美甚左衛門は、書籍商として出版物のみならず商業的経済、都市、流通の側面にも密接に関わっていた(16)。すなわち、彼らをつなぐ街道は何より物資輸送の道でもあった。次章ではこの点を踏まえ、松本町の商人を軸とした松本地域文人ネットワークが取材を通じてもたらした地域認識とその空間的範囲について、各街道の性質を焦点に考察していく。

Ⅳ　街道と地域認識の文脈

（1）　善光寺と松本

善光寺道は善光寺町と松本町を結ぶ唯一の幹線であり流通路であったが、結ばれる両町の流通機構上の性格は大きく異なるものであった。松本町が信州有数の規模をほこった松本藩の城下町として、藩領経済圏の中心として流通の拠点であったのに対して、善光寺町は寺領にあり有力な封建領主の後ろ立てを持てなかった。善光寺町は、町自体の人口と善光寺参詣人による消費として、また善光寺平の商業的農業による商品作物の集散地として、独自の経済圏を構成していたものの、流通機構が脆弱で、隣接する松代藩などの動向や経済情勢による影響を強く受けた（鬼頭1980）。さらに、松本からは、名古屋・上方へは中山道があり、江戸へも保福寺通りなどから上田を経由した流通路があったために、大消費地への特産品の出荷に関しては松本町と善光寺町は別の系統の流通路上にあったといってよい。前者の位置する中南信地域では組織的な中馬による運輸が盛んであったのに対し、後者の位置した東北信地域ではそれらの発達がほとんど見られなかったことなどもこの一面をあらわすものであろう（古島1944）。したがって、両地の商人が相互に地域的な地理的認識を深く共有して密接に結びつくほどには交流がなかったと思われる。青木（1998）が指摘するような、善光寺町に関する地誌的記述の少なさも、善光寺における有力な取材協力者が高美甚左衛門らをはじめとする信州における協力者の人脈からは得られなかったことに起因するのではないかと推察される。

また、松本－善光寺間の善光寺道沿いの記述を『善光寺道名所図会』から見てみると、丹波島－善光寺間に比べると松本－丹波島間の地誌的記述が厚い。後者の区間では、更級郡の名所

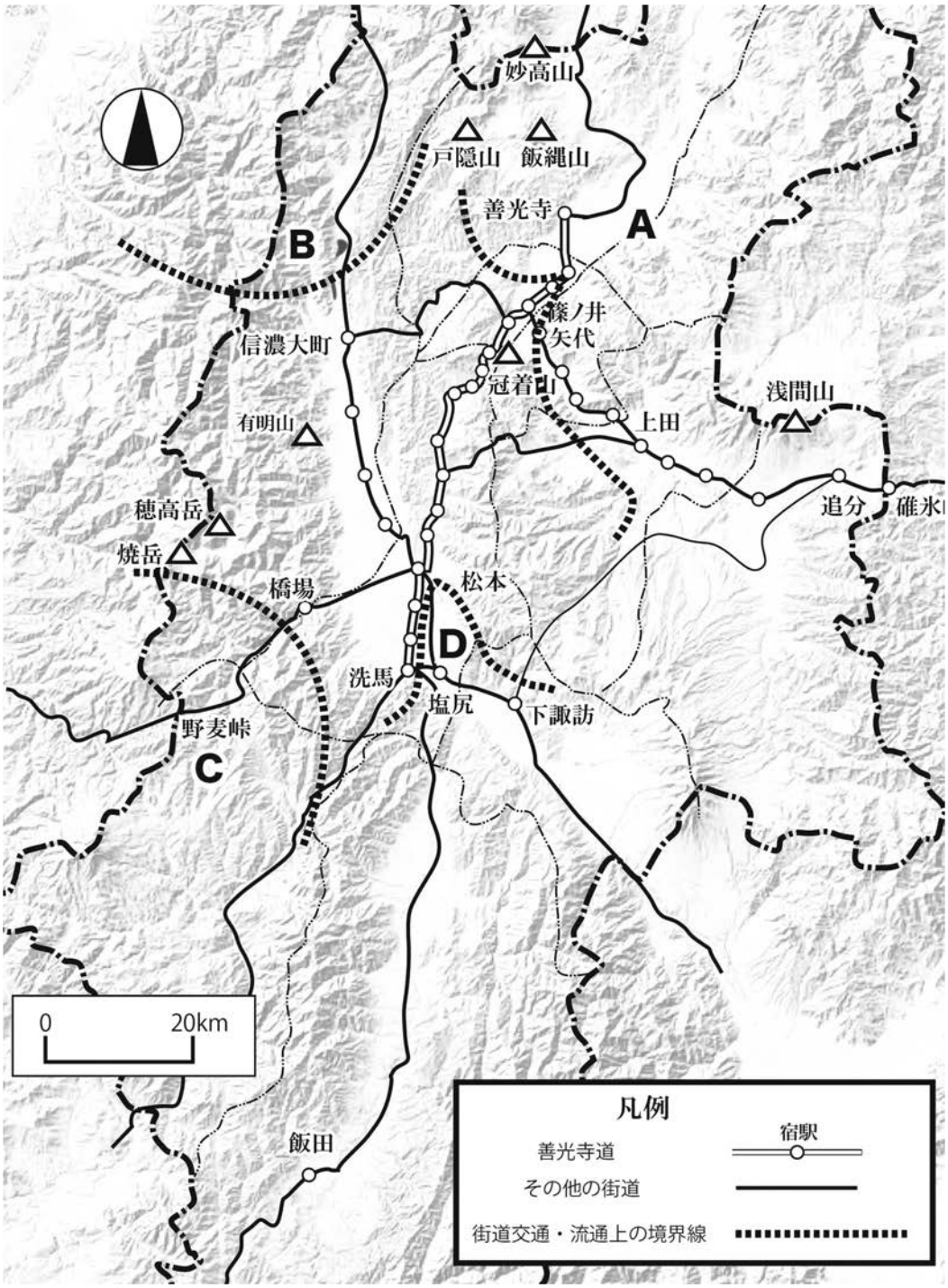

図７　街道と経済圏の関係

である「姥捨山」や「更科の月」に関する記述や挿画にしても、高美甚左衛門ら松本地域文人の文芸が紹介されている。松代藩による独自の間の宿である桑原宿を宿駅として記述していないのも、それを利用することがほとんどないと思われる松本商人の流通に絡んだ人脈によって

この地域の取材が行われた証左と思われる。小松（1981）は、正徳４（1714）年から享保８（1723）年までの青柳宿問屋経由の継荷物を分析して、川中島方面から来る荷物が量的に多く、その主なものが松代領牧之島・新町から久米路橋、稲荷山を経て松本に集まり、三河・遠江・名古屋へ送られる「川中島たばこ」であるとして川中島以南の善光寺道沿道の更級郡各村と松本町の密接な経済的結びつきを示唆している。また、鬼頭（1980）も善光寺平の特産品の一つである善光寺綿布を扱う「木綿布仲間」を例として、善光寺商人主導の経済圏が犀川以北及び千曲川以西の地区に限定されていたとしている。このように、川中島以南の千曲川西岸地区では、更級郡・水内郡に位置するものの、その地域認識の形成に筑摩郡、安曇郡にある松本経済圏の影響があったと考えられる（図７のＡ）。

（２）　安曇郡、千国街道と松本町

松本から安曇郡を経て糸魚川に至る千国街道は、13の宿場が設置されていたが、大名行列もなく人通りもあまり多くなかったため、物資輸送路としての役割が大きかった。輸送物資の主なものとして、糸魚川からは北陸地方からの塩と肴類、越中の木綿、越中高岡の金物、能登の輪島塗、加賀九谷の陶磁器などがあった。また安曇郡からは麻荷、竹荷、漬わらびなどの物資が松本町へ運ばれた（松本市1995b: 102-121）。

前章までにみたように、十返舎一九が松本町を起点として成相新田、栗尾山満願寺を往復し、『善光寺道名所図会』では穂高村を境界に松本町からの記述が区切られるなど、穂高、成相新田に比べて大町、池田へは、松本町から心理的に距離があったように思われる。千国街道に沿った流通の文脈から考えると、実際の距離以上に信濃大町がもつ流通上の重要な中継地としての性格がこうした認識に影響していることに気づく。大町以北の千国街道が山間の険路であったために歩荷か牛背による運輸に頼ったのに対して、大町以南では中馬による輸送が可能であった（平川1984）。また、信濃大町には善光寺、稲荷山へと直接通じる道が接続していたので、流通上の重要な結節点であったことも関係して、松本経済圏に属しつつも、やや独立した経済的性質を持っていたことが想定される（図７のＢ）。

（３）　飛騨街道と松本

飛騨街道は飛騨と江戸を結ぶ政治的な道として、また歩荷や牛方などによる交易の道として江戸時代以降重要視されていた。『善光寺道名所図会』で紹介される橋場（島々村）は松本藩によって番所がおかれ人馬や物資の動きが監視されており、「水澤若沢寺伽藍并雑食橋図」中には橋場付近の詳細な様子も描かれていた（松本市1995b: 102-121）。

しかし、天保年間は上高地を経由する飛騨新道が開削中であり、その途中にある焼岳に関して言及が見られるが、その他に島々村以西の飛騨街道に関する記述は見られない。おそらく番所がおかれた橋場が直接的な松本町を中心とする経済的影響圏の西限と考えられ、取材もここ

までに限られたのであろう。上述した穂高神社奥宮の掲載順に関する混乱は、穂高神社と橋場という地理的に離れた２箇所で情報が得られたためではないかと推測される。たしかに、天保年間からは寒鰤に代表される物資がこの道を通じて飛騨高山から松本にもたらされるようになっていくが(松本市1995b: 102-121)、飛騨新道開削の前夜に取材されたと考えられる『善光寺道名所図会』の記述には、この道に対して飛騨高山へ通じる交易路としてよりは単に松本西郊へのびる交通路としての認識が色濃い。これには、先に述べた千国街道同様、橋場以西の飛騨街道も牛か歩荷による運輸しか受付けなかったことも影響していただろう(図７のＣ)。少なくとも、十返舎一九や豊田利忠がこの道を飛騨へ通じる道として特別な注意を払っている形跡はない。

(４)　五千石通りと中馬輸送

先に比較した十返舎一九と豊田利忠の松本地域取材における相違点の一つとして目立ったものに、五千石通りの記述があった。前者ではこの道に注意した形跡はなかった。これに対して、後者では旅人に紹介する類いの道筋ではないということを再三強調しながら、沿道にある霊場・名所を紹介していた。

ここで注目したいのは、五千石通りの中馬による流通路としての性格である。五千石通りは北国脇往還と並行して塩尻－松本間を結ぶ間道であり、高島藩の支配下にあったが、松本町の経済圏に属していたため、塩尻から松本への近道であった。また口銭を逃れるための間道通行が好まれたことから、周辺の村々では中馬稼ぎが非常に盛んであった。そのため、田川をはさんだ北国脇往還の村井宿としばしば争論になったことが明らかになっている(図７のＤ)(松本市1995b: 102-121)。したがって、倉科七郎左衛門や今井六右衛門といった宿駅松本町の有力者を中心とするネットワークとは異なる取材源がこの街道の紹介には関与していたと推測される。

中馬は周辺の農民が城下町や市場へ自分の荷物を運んだ手馬から出発し、領主的運輸機関である宿駅輸送に対して、農民的流通機関としての性格を持っていた(古島1944)。したがって、問屋口銭の徴収をめぐって、宿駅と中馬の対立は再三争論を引き起こし、荷主である町方商人や在方商人も加わって訴訟は江戸の評定所へと持ち込まれることもあった。このような過程を経て、旧来の特権的な運輸機構ではもはや商品生産の展開にともなう流通をになうことができないとの認識から、幕府、領主は中馬慣行の認定を段階的に行っていった経緯がある。近世後期の松本周辺地域では、運送業者としての中馬稼ぎが専業化していく半面、在村の商人が商品輸送のために中馬を活発に使用するという分業関係が成立していた(小野木1968)。このことは農村(在地)の商業化が急速に進展していたことを示しており、中馬輸送によって日常的に通行される五千石通りの存在を『善光寺道名所図会』が強調する背景には、松本町の宿駅問屋など有力者のみにとどまらない取材協力者の人脈があったことをうかがわせる。確証はないが、在方の中馬関係村における協力者が、地域文人のネットワークを介して紹介されたのではないか。

このように、近世後期に城下町の商業圏と密接な関係を持つようになって進行した農村の商業的変化は、地域認識にも大きな影響を与えつつあったことがうかがえる。

Ⅴ　おわりに

以上、本稿では、信州松本町と周辺地域とを結びつけた地域認識の形成に影響を持った近世後期の地誌書として『善光寺道名所図会』を取り上げ、松本町と一体となった周辺地域の地誌記述がどのように取材・収集されたのかについて、近世後期松本における書肆高美甚左衛門を中心とするネットワークに注目して考察してきた。まず十返舎一九の来訪時の例から、地誌情報の取材に協力する松本地域文人の人脈が、城下町松本を拠点とした流通路に沿って周囲と結ばれていたことを確認した。その上で、『善光寺道名所図会』の記載内容を確認し、記載される範囲について、概ね一九と同じルートを辿っていたことが判明した。さらに、こうした人脈が街道という流通の道であったことに注目し、それぞれの街道が持つ運輸上の特性から、自地域として描かれる範囲について考察した。改めてその結果を図７に即して見て見ると、北は流通上の中継地となった信濃大町周辺まで、東は千曲川西岸稲荷宿まで、西は橋場までの範囲に結びつきの強い空間を確認することができた。

ただし、南側については一考の余地がある。松本町の近郊農村地帯である五千石通り沿いは、中馬稼を特徴とする地域として善光寺道沿いの宿駅問屋とは対立する関係にあったが、必ずしも松本町の町人の人脈と敵対的であったわけではない。『善光寺道名所図会』に五千石通りが強調されて描かれているのはこのことを示していると考えられる。それでは、南側の地域の境界はどこに引かれるべきであろうか。

本稿ではこれ以上この点について論じる用意がないが、１点のみ指摘しておくと、『善光寺道名所図会』の「凡例」には「中山道妻籠の橋場より右へ折れて、元善光寺へ参り、塩尻へ出る道の程は、後編にゆづりて爰に略す」とあり、幻となった後編で描く予定があったことがうかがわれる。したがって、場合によってはより南まで、松本町を中心と認識する地域が広がっていた可能性は残る。近世以前において中信地域と南信地域の一体性や地域認識の境界線がどのようなものであったかについては、今後の検討課題としたい。

〈注〉

（１）『信府統記』は明治17(1884)年に初めて活版印刷され、まず吟天社より雑誌「清籟新誌」に一部が連載されてから和本として出版された。吟天社は浅井洌/関口友愛共著『松本繁昌記』の版元でもある。「清籟新誌」の「緒言」では文芸に関心を寄せ、歴史資料となる未発表のものの寄稿を期待し、「忠臣・孝子・貞婦・烈女・徳行・長寿・偉人・俠客」などの事蹟を掲載するという方針をうたい、

発行者である大岩昌臧が地域史の研鑽に励んだことが読み取れる。旧松本藩記録方であった大岩は「郷土歴史」に関心を持つ文化型士族知識人であった(上條1998)。

(２)「信府統記」は掲載史料の質の高さ、史実の考証、論述の客観性などから、多少儒教的、神道的色彩はあるものの編纂の姿勢は実に科学的で実証的とされている(松本市史第二巻歴史編Ⅱ近世: 249-250)。

(３) 嶋屋は商号を丸幸といい、『善光寺道名所図会』「正月十一日松本初市の図」中にもその名が確認できる。明治30年代においても、山本實太郎『松本繁昌記』中篇(1889: 60)に「島幸紙店は本町二丁目に在り西側の中央に位す幸山堂と號し又島屋幸重と云ふ商号は丸幸なりゆえに島幸の名あり」とある。

(４) 鈴木(2005)は、高美甚左衛門の見聞録集『年のおだまき』(1815)から、「夫ヨリチ近々文花ハ盛りになりて毎度江戸名古屋表へ仕入ニ行」と引用している。

(５) 鹿都部真顔「立廻す高ねは雪の銀屏風中にすみ絵の松本の里」という狂歌が刻まれた文政９年(1826) ９月建立の碑である(鈴木2001:135-170)。

(６) 以下、『高美甚左衛門日記』からの引用とその頁数は唐木(1986)による。

(７)「日記」には「おのれハ其セつ小笠原様十五日御ン着の処、兼而御宿わり被仰付あれバ、種々用事故、花垣子同道ニ而先へ帰る［一九は廿日比迄遊ふ］」とある(高美1814: 180)。

(８) 古代東山道とほぼおなじ道筋であったといわれ、歴代の松本藩主が参勤交代の往復に使用して江戸道とも呼ばれた。途中に稲倉峠、保福寺峠の難所があった。なお、松本から上田へは他にも武石峠や三才山峠を通る道があった(松本市1995: 102-121)。

(９) 青木は『善光寺道名所図』において善光寺に関する記述が最も退屈な箇所であると評し、著者豊田利忠が描きたかったものはむしろ善光寺道周辺に広がる人々の生活世界であったと解釈している(青木1998)。

(10) 山本實太郎『松本繁昌記』(1898: 35)など、松本における後の地誌的書物の多くにこの表現の引用が見られる。

(11) 松本城下町は本丸を起点に本町を基軸線として構成されている。近世期の本町では現在より数メートル標高が低く、今日は高層建築のため望めない図中のような城や城山の景観が眺望できていたとされる(田中2004)。

(12) 町問屋の倉科七郎左衛門を示す「倉科」や、松本本町の大名主である今井六右衛門を示す「今井」など(鈴木2001)、地域の有力者を示す幟の描写も見られる。また、尾州関係の記載が多いのも特徴で、尾張との深い関係がうかがえる。

(13) 深田久弥『日本百名山』はこの「穂高岳記」に関して、「その記文から推して、彼が頂上に立ったとは考えられない」(深田1964: 239)としている。

(14) 道中の生業に関する情景として、明礬採取に関する以下の記述がある。「西条より左へ脇道に入て別所村の内に明礬の出る岩山あり、樵路もなき厳石の面を蜘蛛の如くつたひて明礬を採る人所々に見ゆるなり」(信濃史料刊行会1983: 124)。

(15) 桑原宿は正規の宿場ではなく、松代藩が定めた間の宿であり、松代藩専用のものと思われる。伝馬業務はしないが、後には茶屋や旅籠屋ができ稲荷山宿とトラブルをおこしている(小松1981)。

(16) 墨・筆・紙は高美屋の主力商品であり、他にも伊那天竜館製「万病養命酒」を扱っていたことが明らかになっている。当時は三都の大きな書店にしても書籍以外の商品を扱っていない店は皆無に近く、まして地方書店では書籍以外の商品にも経営の多くを依存していたとされる(鈴木1997)。

〈文献一覧〉

青木治 1985. 穂高神社奥社の成立. 信濃37(7): 67-81.

青木隆幸 1998. 解説. 豊田庸園『版本地誌体系15善光寺道名所図会』597-610. 臨川書店.

青木隆幸 1999.『善光寺道名所図会』成立考. 信濃51(7): 28-46.

浅井洌・関口友愛 1883.『松本繁昌記』吟天社.

信濃史料刊行会編 1983.『新編信濃史料叢書第二十一巻　善光寺道名所図会』信濃史料刊行会.

朝日新聞松本支局編 1982.『秘録　北アルプス物語』郷土出版社.

網島聖 2010. 明治後期地方都市における商工名鑑的「繁昌記」の出版―山内實太郎編『松本繁昌記』を事例に―. 史林93(6): 119-144.

市川健夫 1998.『日本アルプスと上高地』大巧社.

井戸庄三 1966. 明治初期町村分合に関する二，三の問題―長野・山梨両県を中心として―. 人文地理18: 364-384.

今井金吾 1997.『江戸の旅風俗-道中記を中心に』大空社

太田秀保 2003. 塩の道. 高木俊輔編『街道の日本史26　伊那木曾谷と塩の道』80-86. 吉川弘文館.

大室幹雄 2002.『月瀬幻影 近代日本風景批評史』中央公論新社.

山本實太郎 1898.『松本繁昌記』郁文堂.

小野和秀 2004. 特産となった生坂煙草. 松本城下町歴史研究会編『よみがえる城下町・松本 息づく町人たちのくらし』82-83. 郷土出版社.

小野木大乗 1968. 信濃松本地方における流通機構の変質過程―中馬輸送の展開を中心として―. 信濃21(7): 18-34.

唐木伸雄 1986. 解説.『信濃路の十返舎一九『滑稽旅賀羅寿』』131-189. 信毎書籍出版センター.

小松克己 1981. 善光寺道（北国脇往還）の成立と展開. 信濃33(12): 87-101.

小松芳郎 1996. 松本における一〇〇年の近代と現代. 信大史学21: 1-18.

十返舎一九 1822.『滑稽旅賀羅寿』. 唐木伸雄 1986.『信濃路の十返舎一九『滑稽旅賀羅寿』』3-130. 信毎書籍出版センター橘川.

白石太良 1975. 空間的広がりとしての近世郷域と明治地方行政領域の整合関係―因幡国の場合―. 歴史地理学紀要17: 113-140.

杉浦直 1991. 旧藩境地域における空間組織と領域性―北上市鬼柳・相去地区の調査から―. 人文地理43(5): 1-24.

鈴木俊幸 1996. 書籍の印刷・流通・享受. 鈴木俊幸編『近世後期における書物・草紙等の出版・流通・享受についての研究―木曾妻籠林家蔵書、及び、木曾上松臨川寺所蔵版木の調査を中心に―』（一九九五年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書）9-12.

鈴木俊幸 1997. 地方の本屋さん―たとえば高美甚左衛門―. 国文学42(11): 103-107.

鈴木俊幸. 2001.『一九が町にやってきた―江戸時代松本の町人文化―』高美書店

鈴木俊幸 2005. 地方書商の成長と書籍流通―信州松本書肆高美甚左衛門を例に―. 歴史評論664: 17-29.

鈴木俊幸 2006.『江戸の読書熱―自学する読者と書籍流通―』平凡社.

高美甚左衛門 1814. 高美甚左衛門日記. 唐木伸雄 1986.『信濃路の十返舎一九『滑稽旅賀羅寿』』174-181. 信毎書籍出版センター.

田中薫 2004. 本町からの城と城山の景観―本町町割の基軸点はどこか―. 松本城下町歴史研究会編『よみがえる城下町・松本 息づく町人たちのくらし』88-89. 郷土出版社.

豊田庸園 1998.『版本地誌体系15　善光寺道名所図会』臨川書店.
中村勝実 1991.『信州南北戦争―県庁争奪、百年の戦い―』櫟.
平川新 1984. 松本藩の交通制度と運輸機関. 信濃36(8): 559-575.
深田久弥 1964.『日本百名山』新潮社.
古川貞雄 2000. 近世史料にみる信濃. 松本市史研究10: 26-44.
古島敏雄 1944.『信州中馬の研究―近世日本陸上輸送史の一齣―』伊藤書店.
松本市編 1996.『松本市史　第一巻　自然編』松本市.
松本市編 1995a.『松本市史第三巻　歴史編Ⅲ近代』松本市.
松本市編 1995b.『松本市史第二巻　歴史編Ⅱ近世』松本市.
矢守一彦 1984.『古地図と風景』筑摩書房.